

平成 17 年度理事会，評議員会ならびに総会における報告承認決定事項

第 48 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は，春日雅人会長主宰のもとに平成 17 年 5 月 12, 13, 14 日の 3 日間，神戸市港島区ポートピアホテル，他において開催された．これに先立つ理事会，評議員会は 5 月 11 日ホテルオークラ神戸において，また総会は 12 日ポートピアホテル大ホールにて開催された．

1. 第 48 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会の経過報告 (春日会長)

第 48 回日本糖尿病学会年次学術集会を，平成 17 年 5 月 12 日(木)，13 日(金)，14 日(土)の 3 日間，神戸市の神戸国際会議場・神戸国際展示場・ポートピアホテル・神戸商工会議所を中心に開催しました．

今学術集会のメインテーマは「生命科学が切り拓く糖尿病学の新たなステージ」とし，特別講演の演者として C.Ronald Kahn 先生をお招きしました．Kahn 先生には“Dissecting Insulin Signaling in Liver Using Tissue Specific Knockout and shRNA”と題してインスリンシグナルに関する最新の研究成果を発表いただきました．

河合隼雄先生をお招きして行った「糖尿病診療における臨床心理の役割と実際」をはじめとして，基礎的研究から実地臨床にいたる幅広い分野にまたがったテーマで計 17 題のシンポジウムを企画し，そのうち“Hepatic gene expression and energy homeostasis”，“What's the difference? -Type 2 diabetes mellitus in Asian and Caucasian”，“Global aspects of the certificated diabetes educator: past, present and future”では発表も討論も英語で行いました．「メタボリックシンドローム—2 型糖尿病と心血管病の架け橋—」には多くの皆様に関心を持って頂き，900 名の会場に入りきれない状況となりました．さらに教育講演では，糖尿病の診断から治療，合併症，特別な管理を必要とする糖尿病まで計 12 題の講演が行われ，会場をうめつくした会員が熱心に聞き入っていました．

一般演題では，491 題の口演発表，1008 題のポスター発表が行われ，海外からも 15 題の一般演題の発表があり，活発な討議が行われました．

今学術集会の会期中は天候にも恵まれ，参加者は医師・コメディカル合わせて 8,300 名に達し，海外からも約 90 名が参加され，国内のみならず海外の参加者とも情報を交換し，親睦を深めることができました．

学術集会 3 日目の午後には糖尿病協会との共催で，ポートピアホールにて市民のための糖尿病フォーラム

「糖尿病治療の最前線—よりよい糖尿病治療をめざして—」を開催し，約 1,700 名の参加者を得て大変意義深いものでありました．

2. 平成 16 年度事業報告および庶務報告

(岩本理事)

●事業報告

1) 第 47 回年次学術集会

会 長 岩本安彦(東京女子医科大学糖尿病センター)

会 期 平成 16 年 5 月 13・14・15 日

会 場 東京国際フォーラム

参加者 8,500 名

○会長講演 糖尿病センターにおける臨床と研究

○特別講演 1. Genetics of type 2 diabetes mellitus
他 1 題

○プレナリーレクチャー

1. インスリンシグナリングと糖尿病 他 2 題

○パネルディスカッション

1. 糖尿病根治の時代への扉を開く—1 型糖尿病診療の未来 他 1 題

○シンポジウム

1. 大規模臨床試験とその後の展開 他 11 題

○ワークショップ

1. 1 型糖尿病の根治療法としての脾(島)移植

他 5 題

○アジアセッション Asian Diabetes

○教育講演

1. 糖尿病診療ガイドラインと糖尿病診療

他 13 題

○市民公開講座 1 部 特別講演 1. 糖尿病治療の進歩—これまでの治療・これからの治療 他 1 題

2 部 北原白秋を唄う—北原白秋と糖尿病—

○学会賞受賞講演

ハーゲドーン賞 2 型糖尿病の遺伝因子と分子機

構

- リリー賞 ①消化管シグナルによる膵 β 細胞・
脂肪細胞の機能関連とその破綻
②劇症 1 型糖尿病の発見・確立とそれ
に基づく 1 型糖尿病の新しい病型分
類

○口演発表 502 題
○ポスター 862 題

2) 出版事業

- ①会誌「糖尿病」第 47 巻 4 号, サプリメント 1(劇症
1 型糖尿病シンポジウム), サプリメント 2(抄録
集)~第 48 巻 3 号を発行
②糖尿病患者向け指導書
i 糖尿病食事療法のための食品交換表 第 6 版
300,000 部発行
ii 糖尿病治療の手びき 30,120 部発行
iii 糖尿病性腎症の食品交換表 15,000 部発行
iv 糖尿病食事療法のための食品交換表 CD-ROM
4,500 部発行
v 糖尿病性腎症の食品交換表 CD-ROM 付き
2,000 部発行
vi Food Exchange List 増刷なし
③医師, コ・メディカル向け指導書
i こどもの糖尿病・サマーキャンプの手引き
増刷なし
ii 糖尿病食事療法指導のてびき 増刷なし
iii 糖尿病療養指導の手びき 10,020 部発行
iv 糖尿病治療ガイド 2004-2005 130,000 部発行
v 糖尿病学用語集 増刷なし
vi 糖尿病遺伝子診断ガイド 増刷なし
vii 糖尿病専門医研修ガイドブック 5,000 部発行
viii 小児・思春期糖尿病管理の手びき 560 部発行
ix 糖尿病学の進歩 1,200 部発行
x 糖尿病療養指導 1,600 部発行
xi 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン
8,194 部発行

3) 第 39 回「糖尿病学の進歩」

世話人 富永真琴(山形大学医学部器官病態統御
学講座液性病態診断医学分野)
会 期 平成 17 年 2 月 18・19 日(金・土)
会 場 仙台国際センター, 他
参加者 2,878 名

①第 1 日目

A 会場(医師・研究者向け)
○レクチャー: EBM から見た糖尿病における心
血管疾病予防の重要性

<Overview> 糖尿病治療の新時代: 心血管疾
患への挑戦

i 久山町研究 他 4 題

○シンポジウム: 糖尿病における心血管疾患の病
態解明の現状 他 7 題

i 血糖コントロールの立場から

<総合討論> 今後の糖尿病患者の心血管治療の
展望について

B 会場(研究者向け)

○レクチャー: 糖尿病の成因と病態の解明に関す
る研究の進歩(1)

i 膵 β 細胞の機能調節と転写因子 他 5 題

○シンポジウム: 特殊な管理を要する糖尿病治療

i 肥満 他 5 題

○Off Line Discussion

i 治療に困難を極めた症例—1: ミトコンドリア
遺伝子異常糖尿病への思春期におけるアプ
ローチ 他 2 題

C 会場(コメディカル向け)

○シンポジウム 1. 私は療養指導士の資格をこの
ように活用している

i 療養指導士の資格導入の目的 他 8 題目

・総合討論: 療養指導士の将来の展望について

○レクチャー: 糖尿病療養指導士に必要な知識(1)

i 糖尿病の概念 他 6 題

D 会場(研究者向け)

○シンポジウム 1. 包括医療の中での糖尿病診療

i 糖尿病疾患管理モデルと医療経済 他 4 題

・総合討論: 包括医療をどのように有効利用し
ていくのか

○シンポジウム 2: 糖尿病性合併症発症の分子機
構と新たな治療法の開発を目指して

i 網膜症-1: 糖尿病網膜症における AGE の関
与と PEDF によるその阻止 他 7 題

・総合討論: これからの合併症研究の展望につ
いて

②第 2 日目

A 会場

○レクチャー: 糖尿病専門医に必要な心血管疾患
の診断に関する検査

vi 生理検査 他 5 題

○シンポジウム 2. 心血管疾患の進展阻止を目指
して: 適切な治療法選択のポイント

i 血糖降下療法 他 7 題

・総合討論: これからの糖尿病患者の心血管疾
患の予防を目指して

B 会場

○シンポジウム 2. メタボリックシンドローム研究の最前線

i 疾患の概念 他 4 題

・総合討論：日常診療の進め方について

○シンポジウム 3. 糖尿病の民間療法にいかに対処していくか

i 民間療法の実状 他 4 題

・総合討論：民間療法にいかに対処していくか

○Off Line Discussion-2:

iv 治療に困難を極めた症例—4: インスリン投与法(量, 種類)の工夫ではコントロール困難であった筋緊張性ジストロフィーに伴う糖尿病症例 他 2 題

C 会場(コメディカル向け)

○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識(2)

viii 薬物療法：経口血糖降下薬を中心に 他 5 題

○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識(3)

xiv 妊婦の血糖管理 他 6 題

D 会場(研究者向け)

○レクチャー：糖尿病の成因と病態の解明に関する研究の進歩(2)

i SREBP-1c とインスリン作用, メタボリックシンドローム 他 5 題

○レクチャー：糖尿病の成因と病態の解明に関する研究の進歩(3)

vii MODY 遺伝子 他 2 題

○シンポジウム：インスリンシグナルと動脈硬化症の関連性

i インスリンとフォスホリピッド 他 3 題

・総合討論：「インスリンの光と影」

4) 地方会活動

1. 第 38 回日本糖尿病学会北海道地方会

会 期 平成 16 年 10 月 31 日(日)

会 場 北海道大学学術交流会館

会 長 小池 隆夫(北海道大学第二内科)

参加者 401 名

2. 第 42 回日本糖尿病学会東北地方会

会 期 平成 16 年 11 月 6 日(土)

会 場 仙台国際センター

会 長 岡 芳知(東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学)

参加者 453 名

3. 第 42 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会

会 期 平成 17 年 1 月 29 日(土)

会 場 つくば国際会議場(エポカルつくば)

会 長 山田信博(筑波大学臨床医学系内科代謝内分泌)

参加者 720 名

4. ①第 70 回日本糖尿病学会中部地方会

会 期 平成 16 年 9 月 25 日(土)

会 場 名古屋国際会議場

会 長 伊藤光泰(藤田保健衛生大学医学部内分泌代謝内科)

参加者 362 名

②第 71 回日本糖尿病学会中部地方会

会 期 平成 17 年 3 月 26 日(土)

会 場 ぱ・る・るプラザ岐阜

会 長 武田 純(岐阜大学内分泌代謝科)

参加者 330 名

5. 第 41 回日本糖尿病学会近畿地方会

会 期 平成 16 年 11 月 6 日(土)

会 場 大阪国際交流センター

会 長 伏見尚子(住友病院内科)

参加者 1,298 名

6. 第 42 回日本糖尿病学会中国・四国地方会

会 期 平成 16 年 11 月 22・23 日(月・火)

会 場 NTT クレドホール広島, リーガロイヤルホテル広島

会 長 原 均(NTT 西日本中国健康管理センター)

参加者 666 名

7. 第 42 回日本糖尿病学会九州地方会

会 期 平成 16 年 10 月 22・23 日(金・土)

会 場 アルカス SASEBO

会 長 三宅清兵衛(佐世保中央病院糖尿病センター)

参加者 891 名

5) 分科会活動

1) 第 19 回日本糖尿病合併症学会

会 期 平成 16 年 10 月 2・3 日(土・日)

会 場 パシフィコ横浜

会 長 堺 秀人(東海大学腎代謝内科)

参加者 850 名

6) 糖尿病週間

平成 16 年 11 月 8 日(月)~14 日(日), 第 40 回全国糖尿病週間の行事が一斉に行われた。テーマは「軽症糖尿病—予防と治療—」。

7) 国際糖尿病連合会議

IDF-WPR Council Meeting は 2004 年 3 月 26・27 日ソウル, 2004 年 12 月 17 日シドニーで開催された。

第 6 回 IDF-WPR Congress は 2005 年 10 月 22-27 日、バンコクで開催される。第 19 回 IDF Congress は 2006 年 12 月 3-7 日、ケープタウンで開催されることが決定した。

8) 普及・啓発・後援事業

- ①第 40 回全国糖尿病週間の共催
期 間 平成 16 年 11 月 8 日～14 日
- ②日本糖尿病協会への協力
「さかえ」および「つばみ」発行の企画等
- ③第 7 回糖尿病地域医療研究会総会の後援
平成 16 年 7 月 3 日
- ④第 4 回糖尿病教育資源共有機構年次学術集会の後援 平成 16 年 8 月 6・7 日
- ⑤糖尿病 Up to Date 賢島セミナーの後援
平成 16 年 8 月 28・29 日
- ⑥第 25 回腎不全対策を語る集いの後援
平成 16 年 9 月 19 日
- ⑦第 2 回 1 型糖尿病研究会の後援
平成 16 年 10 月 9・10 日
- ⑧平成 16 年度日本糖尿病財団糖尿病予防キャンペーンの後援
平成 16 年 10 月 11 日・10 月 16 日・10 月 31 日・11 月 23 日
- ⑨第 4 回先進インスリン療法研究会の後援
平成 16 年 11 月 13 日
- ⑩平成 16 年度「お米・健康サミット」の後援
平成 16 年 11 月 1 日
- ⑪第 16 回分子糖尿病学シンポジウムの後援
平成 16 年 12 月 4 日
- ⑫第 6 回アジア分子糖尿病学シンポジウムの後援
平成 16 年 12 月 10・11 日
- ⑬第 26 回腎不全対策を語る集いの後援
平成 17 年 1 月 30 日
- ⑭第 19 回日本糖尿病動物研究会年次学術集会の後援 平成 17 年 2 月 4・5 日

●庶務報告

1) 総会

平成 16 年 5 月 13 日、東京国際フォーラム ホール C において第 47 回通常総会を開催した。平成 15 年度事業報告、庶務報告、収支決算報告が承認され、また平成 16 年度補正予算ならびに平成 17 年度事業計画および予算、新役員が承認された。第 49 回会長に田嶋尚子学術評議員が選出・承認された。

2) 評議員会および学術評議員会

平成 16 年 5 月 12 日にそれぞれ開催された。

3) 理事会

定例理事会は平成 16 年 5 月 12 日、11 月 27 日、臨時理事会は 16 年 5 月 14 日、7 月 20 日、17 年 2 月 17 日の合計 5 回開催された。

●会員状況報告(平成 17 年 3 月 31 日現在)

1. 役員等

1) 役員

理 事 18 名(15 年度末 17 名, 5 月承認 5 月理事会推薦 1 名)

監 事 2 名(15 年度末 2 名, 5 月承認)

2) 学術評議員 590 名(15 年度末 589 名, 5 月理事会推薦 1 名)

3) 評議員 88 名(15 年度末 88 名)

2. 会員等

1) 名誉会員 22 名(15 年度末 21 名, 1 名追加)

2) 正会員

16 年 3 月末日会員数 14,131 名

16 年度新入会 899 名

復籍 2 名

名誉会員へ -1 名

退会 -502 名 退会内訳

会費未納 228 名

希望退会 248 名

物故者 26 名

正会員 現在数 14,529 名(398 名増)

3) 賛助会員

16 年 3 月末日会員数 40 名

16 年度新入会 1 名

賛助会員 現在数 41 名(1 名増)

3. 物故会員

功労学術評議員	尾辻省悟	福田雅俊	水田 實
正会員	赤沼宏史	安部行弘	池田好秀
	井手道雄	岩城 巖	大迫宏次
	大田祥子	小笠原徹也	尾形毅樹
	奥田諭吉	梶 麻子	吉良尚平
	久保田正幸	斎藤 登	竹下建夫
	田中一郎	中田 勲	中村信勝
	前島 斌	前田徳雄	松本順二
	宮田 澄	村上 透	

(敬称略, 連絡のあった方のみ)

3. 委員会報告

1)「糖尿病」編集委員会 委員長 佐藤祐造
委員会の開催: 6 回(平成 16 年 4 月 18 日, 5 月 14 日, 7 月 11 日, 9 月 12 日, 11 月 3 日, 平成 17 年 1 月 16 日)

①出版状況：第47巻4号から第48巻3号までの12誌とサプリメントとして「第47回年次学術集会抄録号」,「劇症1型糖尿病シンポジウム」の2誌を発行した。

詳細は下表の通りである。(下段：コメディカルコーナー)

②論文受付状況は、平成16年4月1日より平成17年3月31日までの論文投稿数137編、この期間に掲載可否の決定された114編のうち可となった論文99編、採択率87%であった。採択日から掲載までの期間は2～4ヶ月。

③昨年2月に開催した「劇症1型糖尿病シンポジウム」のSupplement発行にあたり、Supplementの発行に関する糖尿病編集委員会内規に基づいて、通常の論文と同様に当委員会で受付、審査し掲載可否について決定し、平成17年3月31日付けで発行された。掲載内容は委員会報告2編、原著・症例報告12編、抄録である。

④原著論文の投稿が減少、全体的に投稿数が少ない

ことから、また、専門医申請、更新書類提出時にも「糖尿病」掲載論文が必須であるため、理事、監事宛てに投稿依頼に関する通達文書を送り協力を求めた。その結果、投稿論文数は前年比126%(前年投稿数108編)となった。

⑤投稿規定「2. 内容」1)の文中「他誌」についての詳細を注釈*として一文補足した。

2)「食品交換表」編集委員会 委員長 伊藤千賀子

1. 食品交換表編集委員会(2回開催)：平成16年5月15日(土)、7月23日(金)に開催し、以下の作業を行った。

①引用許可願いで委員会審議となった2件を審査したが、引用量が多く、著作権に抵触することから不許可とした。

②日本糖尿病学会の「健康日本21」の糖尿病対策委員会で作成した1,600 kcalの新しい献立を「食事療法指導のてびき第2版」に掲載することとし、次回増刷分から献立を差し替える。

	総頁数	原著	症例	短報	報告	速報	地方会抄録	ミニレビュー	編集者への手紙	委員会報告	特集	会報	その他
Vol. 47 No. 4	90	5 1	2		1		1						
Supplement 1	475	第47回年次学術集会抄録号											
No. 5	74	3 1	2		1		1		1				
No. 6	60	1	4	1	1		1			1			1
No. 7	128	2	1				1	1			1	1	
No. 8	90	2	2				1				1		
No. 9	68	4	6										
No. 10	62	2	4								1		2
No. 11	54	2 1	5	2									
No. 12	84	4 1	2								1		
Vol. 48 No. 1	88	2 1	2	1			1				1	1	
No. 2	70	1 1	6				1						
No. 3	70	1 1	3		1 1		1						
Supplement 1	83	「劇症1型糖尿病シンポジウム」											
合 計	1,496	29 7	39	4	2	0	8	1	1	1	5	2	3

③「CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)」で、初期設定以外のドライブにインストールができないことが判明し、修正版を作成することにした。なお、7月の委員会開催後に献立入力機能にも若干の不具合が見つかり、これらに対する修正用のアップデートを作成した。現在ユーザー登録者にはアップデートを無料で配布している。

次の増刷(平成17年3月予定)では、修正版(ver. 3.0.3)として発行する。

2. 出版事業

①「CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)」と「CD-ROM 版(ver. 2)付糖尿病性腎症の食品交換表」を共に2004年5月に出版。

②食品交換表関連の出版状況：16年4月1日～17年2月28日、()は発行以降の累計部数

食品交換表第6版一売上部数：284,311部
(1,190,470)，発行部数：(1,300,000)

糖尿病性腎症の食品交換表第2版一売上部数：
10,821部(35,114)，発行部数：43,000

糖尿病食事療法指導のてびき第2版一売上部数：
2,943部(5,647)，発行部数：8,000

食品交換表の英訳版一売上部数：89部(1,645部)，発行部数：2,000

CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)一売上部数：
2,197部，発行部数：2,500

CD-ROM 版(ver. 2)付糖尿病性腎症の食品交換表一売上部数：709部，発行部数：2,000

3. 引用許可願いの審査状況(16年4月1日～17年2月28日)

①食品交換表第6版：40件(許可35件，不許可2件，取り下げ1件，審査中2件)

②糖尿病性腎症の食品交換表第2版：2件(許可1件，取り下げ1件)

3)「治療の手びき」編集委員会 委員長 貴田嘉一

①「糖尿病治療の手びき」(改定新版)の改定作業が進行し現在最終稿の印刷およびメデカルライターによる最終校正を行っている。2色刷B5版で平成17年7月出版の予定である。

②「糖尿病療養指導の手引き」改定

患者向けの「糖尿病治療の手びき」の改定にあわせ、これに対応する医師向けの「糖尿病療養指導の手びき」を「科学的根拠にもとづく糖尿病診療ガイドライン」に沿って改定する。平成18年秋に出版予定である。

4)小児糖尿病委員会 委員長 貴田嘉一

①「小児思春期糖尿病管理の手びき」改定
「糖尿病治療の手びき」改定(平成17年7月出版予

定)および「科学的根拠にもとづく糖尿病診療ガイドライン」に沿って改定し、平成18年秋に出版予定である。

②IDF-WPR DiabCare 2003 Childhood 研究

アジア太平洋地域における小児思春期2型糖尿病の実態調査「IDF-WPR DiabCare 2003 Childhood」が終了した。11ヶ国(56施設)から346名の患者がエントリー。そのうち、116名(33.5%)が日本の15施設からの患者であった。平成16年10月15日、データ解析の最終会議がシンガポールで開催され、約半数がコントロール不十分であることが明らかにされた。今後このデータにもとづいて、IDF Consultative Section on Childhood and Adolescent Diabetes では小児の2型糖尿病を最重要課題の一つとしてアクションプランに組み入れることとした。

③Child-Sponsorship Program-IDFを日本糖尿病協会と協力して日本でも実施する予定である。

④IDF Consultative Section on Childhood and Adolescent Diabetes のChairmanを貴田嘉一が務める(2003年9月～2006年9月)。

5)日本糖尿病協会委員会 理事 門脇 孝

日本糖尿病協会委員会は平成11年5月から活動を休止している。日本糖尿病協会が1960年に設立されて以来、当委員会は協会の運営が円滑に行われるようサポートしてきたが、1987年に協会が社団法人となりその組織は着実に堅固なものとなったことから、当委員会の所期の目的は達成されたものと考えられる。従って現在の細則第32条「日本糖尿病協会委員会」の条項の削除を提案する。今後、双方の一層の協力・連携の強化を目指すための新たな方策を議論し、具体的な提案を行っていきたい。

6)選挙管理委員会 委員長 岩本安彦

委員 柳澤克之 山田憲一 河津捷二 榊原文彦
三家登喜夫 石田俊彦 榊田典治

委員会開催 2回 (平成16年7月23日・平成17年1月23日)

17年度は、会長および年次学術集会に関する細則の変更の過渡的な時期であるために、細則変更時の「特記事項」に従って手続きを行なう事を確認した。

特記事項1. この変更は平成17年度から実施する。

2. 平成17年度は次会長、次々会長を選出する。

3. 次会長候補者と次々会長候補者併せて4名を理事会で決定する。

4. 平成17年度学術評議員会においては、
①次会長候補者4名の中から投票によ

り1名を選出する。

②次々会長候補者は、次会長選挙により選出されなかった3名とする。

次々会長候補者3名の中から投票により1名を選出する。

5. 平成18年度以降は次々会長1名を選出する。

第50回および第51回会長候補者の推薦は従来の手順を踏襲し、16年11月27日に開催された理事会にて最終候補者4名を決定した。各候補者の所信は委員会で精査した後、学術評議員に郵送し、ホームページに掲載した。

学術評議員会での投票にあたって次の様に執り行うこととする。

①投票作業は、基本的に候補者のいない支部の委員があたることとして、不足の人員は候補者のいない支部の出席学術評議員の中から委員長が合計8名まで指名する。

②第50回、51回会長の投票用紙は異なった色紙を使用する。

③投票用紙を配布・回収する間は、会場を閉鎖する。

④得票数は50回、51回共に公表する。

⑤最終決定は、単純最多得票者とする。

なお、以上は、投票に入る前に会場に公告する。

7)「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

委員長 小林 正

「糖尿病学の進歩」プログラム委員会は前年度、次年度の世話人を中心にその反省とより充実したプログラムの構築を目指したのとして毎年1回開かれているが、富永世話人による仙台での充実した種々の新しい取り組みを受けて、4月29日に開催され小泉世話人による金沢での開催でのプログラム、会場、ランチョンレクチャー、進行全体など、来年2月17,18日に向け、準備について種々検討された。

8)内科系学会社会保険連合 委員 渥美義仁

平成16年は糖尿病関連の診療報酬として、昨年の学会での報告どおりインスリン注入器加算の実質減額、HbA_{1c}や尿中微量アルブミンなど100点以上の尿検査が明確な理由なくまるめ(200床以上の医療機関)とされるなど厳しい年であった。この改定については学会より再考の要望書を提出したが、残念ながら実現しなかった。この改定によっても一般にHbA_{1c}は継続して測定され、グリコアルブミンの測定が常態化しつつあることから、医療機関の負担は増えるが医療費や患者負担は減らないという状況が生じている。また、尿・糞便などの判断料は、生化学判断料に比べ

ると約1/4と低いままである。以上のように不合理な改定に対して、内保連を通した要望には依然として大きな限界がある。内保連としては内科系医療技術の経済的評価を行いながら、インフォームドコンセントならびにセカンドオピニオンを最重点要望項目としているが、実現していない状況である。

内保連としては、平成18年度に予定されている大きな社会保険診療改定に向けた対応策として、エビデンスに基づく医療技術評価を求めることとしている。現段階では、中医協および厚労省が求める医療の安全、質の担保に対応した要望を提出すべく検討中である。

9)日本医学会に関する報告 評議員 春日雅人

平成17年2月23日に第72回定例評議員会が開催された。新規に日本臨床細胞学会の加盟が承認された。今年度日本医学会あり方委員会が設置された。第27回日本医学会総会は岸本忠三会頭主宰のもと平成19年4月6～8日(金～日)、大阪にて開催の予定である。

10)国際交流に関する報告 理事 清野 裕

国際糖尿病連合西太平洋地区評議会(IDF-WPR Council Meeting)は、2004年3月26、27日の両日に亘って韓国のソウル、2004年12月17日にオーストラリアのシドニーと2回開催され、出席し討議に加わった。ソウルの会議では、当地区の事務局は、従来通りにシンガポールに設置が承認された。タイのバンコクでProfessor Tandhanand 会長の下に2005年10月22—26日に亘り開催される第6回IDF-WPR Congressのプログラムの概要が報告された。IDF-WPRの今後の活動概要が説明されたが教育に関するものが中心であった。IDF-WPR Diabetes Campが2004年8月にソウル開催予定との報告がなされた。そして、IDF-WPR参加国による各国の活動状況が発表された。シドニーの会議では、2004年12月にベルギーのブラッセルで開かれたIDFの会議の報告が中心で、IDFの7地区の会長と理事による会議での協議内容が報告され、7地域はIDF本部管轄下で組織の運営の一本化をはかる。したがって、各地域の会長および事務局員はIDF本部との契約の下、活動することになる。2008年に開催される第7回IDF-WPR Congressには、ニュージーランドと香港が立候補し、投票の結果ニュージーランドに決定した。IDF-WPRに新しく、モンゴル加盟が承認された。

スマトラ沖津波による災害に対し、日本とオーストラリアが中心になり、インスリン治療の糖尿病患者への支援がなされた。日本糖尿病学会および日本糖尿病協会が一緒になって日本政府を動かし活動を支援し、今後とも寄与することになる。とりわけ、貴田嘉一教

授の御尽力は大であった。この活動状況に就いては、IDF 本部のブラッセルに報告した。

IDF-WPR の機関誌「Diabetes Research and Clinical Practice」の発刊は順調で、質の高い論文投稿も増え、impact factor は約 1.7 に上昇し、過去最高となった。

①国際糖尿病連合(IDF)に関する報告

IDF Vice President 堀田 饒

国際糖尿病連合(IDF)の会議は、以下の 2 回が開催された。2004 年 4 月 28 日—5 月 2 日にデンマークのコペンハーゲンと 2004 年 12 月 4、5 日にベルギーのブラッセル。前者では、常任理事会と理事会に、後者は常任理事会に出席したので、その主な内容を列記したい。前者に於いては、各種委員会の活動状況の報告および会計報告がなされた。問題になった一つに、IDF は大きく 7 支部(アフリカ、東地中海・中近東、ヨーロッパ、北米、中南米、東南アジア、西太平洋、尚日本は西太平洋に属する)に分かれているが、事務局の設置場所と事務局員の所属が地域によって、問題が生じていて、IDF 本部(ブラッセル)の統轄下で運営することを基本とすることが決定した。また、2003 年にフランスのパリで開催された第 18 回 IDF 学会の報告がなされた。16,008 名が参加し、上位 3 ヶ国はフランス 1,457 名、アメリカ 969 名、日本 913 名で、成果の大きかったこと、そして収益の一部が IDF に寄附された旨、報告がなされた。また、2006 年に韓国のソウルで開催される予定の第 19 回 IDF 学会が、南アフリカのケープタウンに変更となった経緯が説明された。後者に於いては、IDF のプロジェクトの経過報告と今後の戦略・勧告が討議された。2005 年の World Diabetes Day は 11 月 4 日で、キャンペーンのスローガンは“Put Feet First—Prevent Amputation”に決定し、例年通りに関連した小冊子が発刊されることとなった。また、2006 年に開催される第 19 回 IDF 学会は南アフリカのケープタウンで 2006 年 12 月 3—7 日に決定し、組織委員会の活動状況が報告された。尚、2006 年の第 19 回 IDF 学会の組織委員会が、2004 年 9 月 8 日にドイツのミュンヘン、および 2005 年 3 月 6—9 日に南アフリカのケープタウンで開催され、現在の準備状況およびプログラム作成の在り方と経過が報告された。

11) 学術調査研究・教育に関する報告

理 事 小林 正

学術調査委員会では現在 11 のプロジェクトにて調査研究がなされており、現在一つの調査研究課題がこれに加わるか検討中である。新しくどのような調査研究が必要かは、雑誌「糖尿病」にてアンケートを募ったが、特筆すべき研究課題は寄せられなかった。これら

の研究課題とは別に、糖尿病学会では、糖尿病対策の一環として糖尿病データベース構築なども現在委員会として始まっており、全体としては幅広い分野にわたって調査研究がなされているものと思われる。

(1) 糖尿病関連検査の標準化に関する委員会

委員長 富永真琴

委員会の開催：平成 16 年 5 月 14 日(東京都)、10 月 1 日(横浜市)

テストミール開発ワーキンググループの開催：平成 16 年 5 月 14 日(東京都)、10 月 1 日(横浜市)、平成 17 年 2 月 19 日(仙台市)

GA 標準化ワーキンググループ：平成 16 年 5 月 14 日(東京都)

①HbA_{1c} の国際標準化について

HbA_{1c} 測定用実用標準物質 JDS Lot 2 に関する論文を *Annals of Clinical Biochemistry* に投稿し、2005 年 1 月号に掲載された。平成 15 年 12 月に日本糖尿病学会評議員を対象に HbA_{1c} の国際標準化に関するアンケート調査を行ったが、その結果を糖尿病に投稿した。IFCC 法の理解は十分とは言えないが、移行にあたって名称を変更したいという委員会の提案は多くの方々の賛同が得られている。具体的には A1C-ISP(International Standardized Percent)を提案したい。JDS Lot 2 を引き継ぐ Lot 3 の認証は日本臨床検査標準協議会(JCCLS)で行うことを申し出、承認された。IFCC 法へ移行するに際し基準値の決定が必要であるが、島委員会が行った手法で平成 17 年度に行う。

②血糖自己測定の標準化

血糖自己測定(SMBG)機器の国際規格である ISO 15197 が発効しており、これにより比較対照法の統一がはかられ、標準化するので、この件に関する委員会活動は終了する。

③テストミールの開発

テストミール A の検討が終了し論文化の作業中である。脂質構成割合を 25% にしたテストミール B について平成 17 年度に検討する。

④GA の標準化

平成 15 年 10 月に GA のサーベイを行い C.V. は 3.9 %以下であった。分析化学的手法に基づく標準測定法について検討中である。

(2) 遺伝子異常による糖尿病に関する調査研究委員会

委員長 南條輝志男

わが国における遺伝子異常による糖尿病の現況の把握と病態の解明、実際の遺伝子検索のあり方などについて種々の検討を行っている。

その一つとして、ミトコンドリア遺伝子異常による

糖尿病の全国調査の結果をまとめ、平成 16 年 6 月号の雑誌「糖尿病」に委員会報告として掲載した(糖尿病 47: 481-487, 2004)。

また、以前より MODY の原因遺伝子の 1 つである HNF-1a 遺伝子の解析支援を行っているが、学会員の先生方より継続してご依頼があり、平成 16 年度だけでも 12 症例の解析支援のお申し込みが寄せられている。委員会で個々の症例を検討した結果、10 例に関し支援を行うことを決定、うち 2 症例はすでに解析が終了しており 4 症例に関しては現在解析が進行中である。この HNF-1a 遺伝子解析支援に関しては、現在も数件のお問い合わせが寄せられており本年も継続して行う予定である。さらに、HNF-1a 遺伝子異常糖尿病以外の「遺伝子異常による糖尿病」に関しても、インスリン遺伝子異常やインスリン受容体異常症などを疑われて委員会に数件御相談があり、今後の検索の手順等に関しアドバイスを行った。

(3) 糖尿病の一次予防に関する調査研究委員会

委員長 小林 正

糖尿病の一次予防は、現在の糖尿病発症の増加している日本において、重要な調査研究の対象となる分野で、委員会では内外の現在までの研究結果を踏まえ、一次予防の対策にどのようなものが有効なのか、また実際的であるのかを纏め、雑誌糖尿病に報告することにし、現在その製作にあたっているところである。

その項目として、

- ①内外の evidence はどこまであきらかにされているか？
- ②一次予防を目指す実際的な方法
- ③糖尿病一次予防がなぜ重要であるか？
 - a. 検診のあり方。
 - b. 検診の結果から介入への問題点とその対策。
 - c. 患者教育の問題点とその対策。
 - d. 食事、運動療法の効果的方法(保険適用はないが薬物療法は?)。

またその予防法の簡単な纏めたものを療養指導師・医師用、患者啓発用などのパンフレットを準備中である。その種類を次のような対象としてまとめることにした。

- ・開業医のできること。
- ・病院のできること。
- ・厚生センター(行政)のできること？
- ・その他

(4) 糖尿病の死因に関する調査研究委員会

委員長 堀田 饒

委員：岩本安彦，大野良之，春日雅人，吉川隆一，

豊田隆謙，中村二郎(50 音順)

第三次(1991-2000 年)糖尿病患者の死因に関する調査では、全国 282 施設から 18,639 症例分のアンケート調査用紙が回収され、データ入力およびデータ解析が終了した。平成 16 年 10 月 31 日に委員会が開催され、解析結果について検討した結果、第二次調査と同様の委員会報告を雑誌「糖尿病」へ投稿するとともに、更なる解析を追加し英文誌へ投稿することとなった。現在、準備中である。

(5) 劇症型及び緩徐進行 1 型糖尿病調査研究委員会

委員長 牧野英一

①劇症 1 型糖尿病調査委員会

本年度も新規症例(21 例)が委員会に報告された。次に、HLA 血清型に関する論文(委員会報告第二報)が 2005 年 2 月号の *Diabetologia* に掲載された。また、疫学調査第一報と「劇症 1 型糖尿病に関するシンポジウム」の報告を兼ねた、「糖尿病」supplement の編集を終え、近日中に刊行される予定である。現在、前年度からの継続事項として、1) 予後調査・前駆症状についての疫学調査、2) 妊娠関連発症症例の疫学調査、が進行しており、3) 劇症 1 型糖尿病発症時に認める肝機能異常に関する疫学調査、が開始された。今後、死亡例、心停止例など劇症 1 型糖尿病の中でも特に重症例の疫学調査、発症機序の検討を進める予定である。また、緩徐進行 1 型糖尿病調査委員会と共同で、1) HLA 遺伝子型、2) 候補遺伝子の SNP 解析、3) 全ゲノムスクランを行っている。

②緩徐進行 1 型糖尿病調査委員会

委員会施設における新規発症糖尿病例の多施設間前向き検討の結果、新規発症“2 型糖尿病”153 例中に 14 %の膵島関連自己抗体陽性例(SPIDDM)を認めた。膵島関連自己抗体の各々の陽性率は GAD 抗体が 73%，IA-2 抗体が 18%，インスリン自己抗体が 18% であり、GAD 抗体陽性率は他と比べて有意に高頻度であった。糖尿病発症時平均 BMI(22.6 kg/m²)は、膵島抗体陰性 2 型糖尿病の BMI(25.3 kg/m²)と比し有意に低値であった。今後さらに症例数の増加に努めるとともに、その自然経過の前向き観察を行っていく。また、横断的・後ろ向き検討として、オンライン・アンケートによる SPIDDM 症例の全国調査を開始した。

③その他

1 型糖尿病遺伝子に関する網羅的解析を進めるため、内外で関連が検討・報告されている候補遺伝子を中心に約 270 の候補 SNP を抽出した。また、急性発症 263 例、緩徐進行 100 例、劇症 73 例、健常対照 227 例(サンプル収集は継続中)のサンプルを調整し、解析センター(東京大学人類遺伝学教室)にて解析予定であ

る。

(6) 食事療法に関する検討委員会

委員長 津田謹輔

委員会開催日 2004 年 8 月 8 日, 2005 年 2 月 12 日
実績と計画

① 食事療法に関する実態調査

- ・今回は学会評議員の協力を得て、患者を対象に糖尿病食事療法に関する実態調査を行った。同時にオーソライズされ、他の疾患と比較可能な Medical Outcome Study の SF 36 を用いて患者の健康に対する意識調査を行った。
- ・601 人から回答が得られ、データの解析を終了した。報告書作成の準備中である。
- ・このグループとは別の糖尿病患者 256 名について同様のアンケート調査を行い現在解析中である。この 2 群について比較する予定である。
- ・次年度は、栄養士など食事療法を指導する側を対象にして、同じ内容の実態調査を計画している。

② 糖尿病患者の代謝機能測定

- ・摂取エネルギー量設定の基礎になるデータを得る目的で、ミナト医科学の呼吸代謝測定システムを用いデータを蓄積中。
- ・例数をもう少し増やして行えるようレンタル期間延長を交渉中。

③ 特定保健用食品データベースについて

- ・正しい情報を提供する目的で、糖尿病に関連の深い血糖、血圧、コレステロールに関連した特定保健機能食品のデータベース作成を計画している。関連企業 89 社のうち、現在 3 分の 1 近くの企業から特定保健機能食品申請論文が届いている。

④ 食事療法に関する公開シンポジウム

平成 17 年 2 月 13 日(日)東京コンファレンスホールで本委員会主催のシンポジウムを行った。医師、栄養士等 280 人の参加があった。

委員会での活動と議論を報告した。

(7) 糖尿病性腎症データベースの構築調査研究委員会

委員長 吉川隆一

本委員会では、糖尿病性腎症の大規模なデータベースを構築し、将来前向き調査を実施することを計画し、その準備を進めてきた。今回「糖尿病データベース構築に関する委員会」(以下、新委員会)が設置されることから、新委員会に今後の活動を委託することとし、本委員会の活動を終了することとした。尚、腎症に関する新委員会での活動に当たっては、「糖尿病性腎症に関する合同委員会」において引き続き議論することとした。

(8) アジア人糖尿病調査研究委員会

委員長 南條輝志男

本委員会は平成 13 年度に「アジア人共通の糖尿病臨床像の把握およびその原因の解明」を目的に発足し、アジア各国(韓国、中国、台湾、香港、モンゴル、フィリピン、タイ、インドネシア、シンガポール、マレーシア)と共同で 1 型および 2 型糖尿病の疫学調査および栄養調査を行うことを決定し、各調査の進め方について協議を行ってきた。平成 14 年 5 月の IDF-WPR において各国代表の承認を得て、共通の調査票を作成し、1 型および 2 型糖尿病の疫学調査を開始した。その結果の一部を平成 16 年度の日本糖尿病学会年次学術集会のアジアセッション「Asian Diabetes」において伊藤委員よりご発表いただいた。また、同シンポジウムでは、アジア各国の糖尿病専門家を招待し、各国の糖尿病臨床および研究の現状の一端についてご発表いただいた。栄養調査に関しても各国での食習慣、食物の違いを考慮し、アジア各国の栄養士の協力を得て、調査票を作成し、調査を行っているところである。平成 17 年度の学術集会においても、シンポジウム「アジア人型糖尿病は存在するか? : What's the difference? Type 2 diabetes mellitus in Asia and Caucasian」が企画されており、アジア各国よりも多数の参加者が見込まれている。今後もアジア人糖尿病の調査研究はもとより、アジア各国の糖尿病専門家との国際交流にも本研究会が寄与できれば幸いである。

(9) 糖尿病性神経障害の実態調査と国際比較調査研究委員会

委員長 堀田 饒

平成 16 年 10 月 31 日に第 2 回委員会が開催された。実態調査の調査項目についての具体的検討が行われ、その内容がほぼ確定したため調査票の作成を進めることとなった。対象施設に関しては、委員より推薦いただくこととなった。国際比較調査に関しては、次回委員会において具体的に検討することとなった。

「糖尿病性腎症データベース」への神経障害に関する項目追加について検討した結果、「アキレス腱反射」と「起立性低血圧」を追加することを提案することとなった。

(10) 妊娠糖尿病の定義・スクリーニング、診断基準の再評価に関する調査研究委員会

委員長 豊田長康

委員：岩本安彦、河盛隆造、折笠秀樹、伊藤千賀子、穴澤園子、佐中真由実、和栗雅子、平松祐司、鮫島 浩、三田尾賢、安日一郎、杉山 隆
妊娠糖尿病(gestational diabetes mellitus : GDM)に

関しその定義、スクリーニング法、診断基準という基本的事項について、わが国の統一した概念に基づく疾患として扱うべく、EBMに基づいた観点から、また、国際的な指針との整合性を考慮に入れた観点からの再評価を行う必要があると考え、本委員会が発足された。

2回の会議を行い、GDMの定義・スクリーニング・診断基準に関する問題点を再確認し、新しい資料やデータをもとに、昨年度に引き続きその対応を検討した。定義に関して、欧米の有識者6名の意見を通し、「妊娠時に糖尿病型を呈した耐糖能低下は、現在の国際的な指針との整合性の観点からは、「妊娠糖尿病」とすることが望ましいと考えられた。ただし、妊娠時にすでに糖尿病網膜症が認められる症例や妊娠時に発症したと考えられる劇症1型糖尿病の取り扱いについては、委員の間でなお意見の相違がみられたので日本糖尿病学会理事会に提出したい。

スクリーニング法に関しては、我が国で現在進行中の多施設共同研究の中間報告を行った。その結果、妊娠初期のスクリーニング法として精度はGCTが最も優れていた。コストの点を考慮に入れると、妊娠初期は随時血糖値が、中期はGCTが最も優れていた。今後2005年12月までのデータをもとに来年度中に最終結果をまとめ、本委員会の提案として日本糖尿病学会理事会に提出したい。GDMの診断基準については、HAPO(hyperglycemia and adverse pregnancy outcome) studyなるRCTの結果が出るまでは、現行の診断基準を用いることが現実的な対応であると考えられる。

平成17年度予算

①テーマ：妊娠糖尿病の定義・スクリーニング・診断基準の再評価に関する調査研究委員会

②目的・方法

妊娠糖尿病(gestational diabetes mellitus: GDM)は各種の短期・長期的な母児合併症を生じること、および将来の糖尿病発症の危険因子となることから現在、GDMの定義、スクリーニング法、診断基準という基本的事項について、わが国の指針と国際的な指針の間に相違があり、また、わが国の専門家の間でもなお議論があって、医療関係者や教育関係者に多大な混乱を招いていることも否めない。このような好ましくない事態を解消するためには、GDMの定義、スクリーニング法、診断基準に関して、EBMに基づいた観点から、また、国際的な指針との整合性を考慮に入れた観点からの再評価を行う必要があると考えられ、本委員会が発足に至った。

方法としては、わが国で妊娠糖尿病に関する臨床成績や論文を有する内科および産科領域の研究者や、一般的な立場から助言のできる糖尿病学の研究者、統計

学者よりなる委員会を組織し、妊娠糖尿病に関して今までに得られているわが国および海外の臨床成績の解析を行うとともに、現時点で得られているエビデンスから導かれる妥当な見解を提出する。本委員会が提出する最終報告の質としては、日本糖尿病学会や日本産科婦人科学会などの関連諸学会の指針に反映されうるレベルを目指す。

③平成17年度：解析と調査研究の継続および成績の集計

(費用概算)

調査研究費 50万円 内訳 通信費・アンケート調査・データ解析費・雑費

交通費 120万円

会議費年3回 30万

(11)日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する実態調査研究委員会

委員長 清野 裕

本委員会は日本人におけるインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を調査し、これらを評価するための検査法や結果の解析法を確立すると共に、今後標準的な評価法を提唱するため設置された。現在、各委員がそれぞれの施設における現時点での調査経過を報告しつつあり、最終的に全国的なレベルで多数例の集計・解析を行う。

既に、「日本人の耐糖能低下要因」、「日本人2型糖尿病の糖代謝—ミニマルモデルを用いた検討」、「ハワイ日系米人などとの比較による日本人糖尿病発症要因」、「インスリン抵抗性指標HOMA-Rと様々な因子との関連性」、「Primacy of β -cell dysfunction in the development of hyperglycemia」、「UCP-2遺伝子多型と糖尿病・肥満の病態の関連」、「日本人におけるインスリン分泌・抵抗性—ミニマルモデル解析—」、「田原坂スタディの経過報告」、「インスリン抵抗性の新しい評価法」、「境界型から2型糖尿病への移行—インスリン抵抗性およびメタボリックシンドロームに関する検討」、「インスリン抵抗性—グルコースクランプ法による300例の成績より—」などについての調査研究報告があった。

日本人の耐糖能低下にはインスリン初期分泌能の低下が重要であること、グルコース感受性を含めた耐糖能低下要因をさまざまな病態で検討したこと、ハワイ日系米人との比較から日本人の特徴が明らかとなること、臓器の脂肪沈着計測がインスリン抵抗性とよく相関すること、正常耐糖能者のような初期の耐糖能に注目すると、インスリン分泌低下が耐糖能低下に果たす役割はprimacyと考えられること、UCP-2遺伝子多型がインスリン分泌に関与すること、種々の病態でイ

インスリン分泌能, インスリン抵抗性, グルコース感受性を評価する重要性, 介入による BMI, 血糖値, 中性脂肪や血圧の降下作用, GIPA(glucose insulin plot area)のインスリン抵抗性評価法としての有用性, 糖尿病発症予知におけるインスリン分泌能とインスリン抵抗性の役割, インスリン抵抗性のグルコースクランプ法による評価などについての報告があった。今後, 具体的な評価方法, データの集計・解析法などについて委員からの意見をj得て多施設からのデータを集積し, それぞれのデータを用いて種々の評価方法に基づいて解析し, 日本人糖尿病の実態解明を行う。

12)平成 17 年度坂口賞および学会賞に関する報告

- 1)坂口賞は, 池田義雄, 梶沼 宏の2氏に授与する。
- 2)学会賞審査委員会(委員長 堀田 饒)を平成 17 年 1 月 30 日に開催し, 各受賞者を選出した。

①平成 17 年度ハーゲドーン賞

伊藤千賀子(広島原爆対策協議会健康管理・増進センター)「糖尿病の発症ならびに診断に関する疫学研究」

②リリー賞

- a. 山岸昌一(久留米大学医学部第三内科)「糖尿病血管合併症発症, 進展の分子機構の解明」
- b. 金藤秀明(大阪大学大学院医学系研究科情報伝達医学 病態情報内科学)「酸化ストレス, JNK 経路を介した糖尿病発症, 進展の分子機構の解明」

13)学会認定事業に関する報告

(1)専門医認定委員会 委員長 清野 裕
委員会は小委員会も含め 7 回開催された。平成 16 年度の専門医試験は 274 名が受験し, 171 名が合格した。研修指導医は 110 名(随時審査も含む), 専門医研修認定教育施設は 34 施設が認定された。更新は専門医 687 名・指導医 119 名・認定教育施設 58 施設であった。専門医の更新・申請書類を見直し, 改訂を行なった。認定教育施設・専門医の糖尿病研修カリキュラムについても見直しを行っており, 改訂予定である。また, 新たに研修指導医のいる条件を満たしている無床の施設を, 認定教育施設(無床)として認めることとした。研修期間は 1 年を限度とする。

＜専門医評価機構の現状について＞

- ①専門医制度認定機構から専門医評価機構に名称変更を提案した。現在のところ第三者機関が中心となって認定するのは困難。制度や専門医の評価, 不正に対する罰則などを中心に活動したい(これについては賛否同数で保留となった)。
- ②医学会加盟学会以外の加入を認める。これは機構

に加わらないで認定を行なう動きが種々の分野で出てきているので, むしろ機構に加盟を認めて専門医のレベルを維持するため。

- ③上記機構からの指示により, 必要と考えられる専門医数の試算を行うこととした。

- ④専門医の医療事故, 不正行為などの実態調査と対応策の検討を行うこととした。

2)試験委員会 委員長 南條輝志男

平成 16 年 5 月 14 日, 第 20 回試験委員会を開催し, 第 15 回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担, 口頭試験担当者, 試験監督担当者を決めた。8 月 8 日に委員長, 数名の委員により試験問題のチェックを行い, 9 月 12 日に委員全員で試験問題の選定を行った。第 15 回専門医試験は, 平成 16 年 10 月 24 日, 都市センターにおいて実施した。口頭試験において各部屋の試験官に ABC の番号札を付け, 受験者からわかりやすいよう対応した。受験者は 274 名で, 11 月 2 日に合否判定(171 名合格)案を決定, 11 月 7 日専門医認定委員会に報告, 承認された。

なお, 第 16 回(平成 17 年度)の試験は平成 17 年 10 月 23 日(日)都市センターにて, 第 17 回(平成 18 年度)の試験は平成 18 年 10 月 22 日(日)全協連ビルで実施することとした。

14)学会設立 50 周年記念事業に関する報告

理事長 春日雅人

現在, 記念式典委員会(委員長 岩本安彦理事), 記念誌作成委員会(清野裕理事), 記念国際シンポジウム開催委員会(小林正理事)を設置し, 準備を始めた。開催日は平成 19 年 11 月 10・11 日(土・日), 会場は東京国際フォーラムで予定している。

15)分科会に関する報告 日本糖尿病合併症学会

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は, 平成 16 年 10 月 2, 3 日の 2 日間に亘って堺秀人会長(東海大学医学部内科学系腎代謝内科学教授)の下, 第 19 回日本糖尿病合併症学会として横浜のパシフィコ横浜にて開催された。

学会は, 特別講演 1 題, シンポジウム 6 題, そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた。市民公開講座も 10 月 11 日に伊勢原市民文化会館でもたれた。本学会が設けた学会賞の各賞の受賞者は以下の各先生。Outstanding Foreign Investigator Award: Michael Mauer 教授(メネソタ大学), Distinguished Investigator Award: 豊田隆謙(東北労災病院), Expert Investigator Award: 堀内公正(熊本大学大学院医学薬学研究部病態生化学), Young Investigator Award: 宮田 哲(神戸海星病院内科), 西尾喜彦

(滋賀医科大学内科), 曾根博仁(筑波大学臨床医学系代謝内分泌内科)。

平成 17 年に予定されている第 20 回日本糖尿病合併症学会は, 河盛隆造会長(順天堂大学医学部内科学・代謝内分泌学教授)の下, 10 月 7, 8 日の 2 日間に亘って, サンケイプラザを会場にして開催されることが決定している。学会の機関誌「糖尿病合併症」は抄録号を含め, 3 回発行された。

16) 糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

理事長 春日雅人

「対糖尿病対策 5 ヶ年計画」作成委員会, 「健康日本 21」糖尿病対策検討委員会, 日本人の糖尿病データベース作成委員会を発足させ, 日本医師会, 日本糖尿病協会と協力し「糖尿病対策推進会議」を設立した。この取り組みについては理事会の意見を会誌とホームページに掲載し, 会員に理解と協力をお願いした。

17) 各種委員会

(1) 糖尿病治療ガイド編集委員会

委員長 岩本安彦

委員: 荒木栄一, 岩本安彦, 門脇 孝, 柏木厚典, 貴田岡正史, 田嶋尚子, 南條輝志男, 櫻井秀也(日本医師会)

委員会開催 2 回(平成 16 年 11 月 28 日, 平成 17 年 2 月 5 日)

前年度に引き続き「糖尿病治療ガイド 2004-2005」の改訂作業を進め, 最終的に「科学的根拠に基づく診療ガイドライン」との内容の整合性に努めるとともに, 最終稿に対して寄せられた学術評議員などからの意見・提案などふまえて加筆・訂正を行った。その結果, 2004 年 8 月 26 日, 第 1 刷 5 万部を発行した。その後, 9 月 17 日には第 2 刷 3 万部, 10 月 22 日には第 3 刷 2 万部をそれぞれ発行し, 累計 10 万部に達している。その内, 10 月末の売上部数は 81,239 部と順調な伸びを示している。

その後, 「糖尿病治療ガイド 2006-2007」の改訂・発行にむけてさらに 2 回の編集委員会を開催し, 「2004-2005」の最終稿に寄せられた評議員などからの指摘事項, 要望事項を中心に検討し, 改訂作業を進めている。

なお, 2005 年 3 月末日現在, 「2004-2005」の発行は累計 13 万部に達している。

(2) インターネット委員会

委員長 田嶋尚子

本委員会は, 平成 16 年 6 月 23 日(水)(東京)および平成 17 年 2 月 18 日(仙台)に開催された。継続審議事項や, 学会ホームページへのリンク依頼および広告掲載の許可等については, イ委員会委員メイリングリス

トを利用して常時, 全委員参加のもとに検討している。

①新委員の選出

インターネット委員会内規に従って新委員が選出された。イ委員は支部選出委員 8 名, 専門委員 7 名からなる。

②サーバーの移行

新規立ち上げ以来ソネットに委託してきたが, 今後の柔軟な運用と価格の面から新たな委託業者へ移行することについて検討を重ねてきた。その結果, 平成 16 年 10 月に理事会の審議をへて杏林舎と契約書を取り交わした。電子メールや web 機能の詳細については継続審議事項とした。

③ホームページについて

学会ホームページについては, 内容の充実や英文版ホームページ作成を検討中である。支部ホームページは, 現在, 全ての支部で稼働していない。最も充実している九州支部ホームページを見本にして, 支部共通のホームページを立ち上げることにした。複数の委託業者から見積を取り, これに関する予算を計上したところ, 初年度(初期費用)200 万円, 次年度からの維持費は年間 50 万円(7 支部)と試算された。

④オンラインジャーナル

学会誌「糖尿病」43 巻(2000 年)~45 巻(2002 年)は, 医学書院に委託してホームページに掲載している。46 巻(2003 年)以降は掲載準備中である。「科学的根拠に基づく診療ガイドライン」(南江堂)の一部を, 理事会の承認を得た後 3 ヶ月間, 学会ホームページに掲載することとした。

⑤医学中央雑誌刊行会からのホームページへの掲載依頼について

糖尿病学会総会発表抄録の全文のデータベース化の申し出, ならびに, 学会に所属する出版物その他に関する事項等についてホームページへの掲載依頼を受けている。英文抄録の掲載を含め, 継続審議中である。

(3) 糖尿病性腎症合同委員会

世話人 岩本安彦

平成 16 年度の第 1 回合同委員会(通算第 19 回)は 5 月 15 日(土)東京国際フォーラムにて両学会からアドバイザーを含め 14 名が出席し, 羽田勝計委員が議長を務めて開催され, 以下の議題について討議を行った。

①IDF/ISN 合同糖尿病性腎症に関するパンフレットの翻訳発行について

堀田 IDF 副会長から要請があった標記パンフレットの日本語訳の発行を両学会合同で行うことが了承された。オリジナルの発行スポンサーがロシュであることから日本ロシュ社に翻訳を依頼すること, 監訳担当者を両学会から出すこと(糖尿病学会: 守屋委員)などの方針が決められ, 両学会の理事会に諮ることとした。

②糖尿病性腎症診療ガイドラインについて

微量アルブミン尿のスクリーニング法として随時尿での基準値 (50~400 mg/gCr) に関するデータが報告され、データベース構築に際しては、早朝第一尿 30~300 mg/gCr を基本としてこの随時尿の基準値も用いる方向が討議された。さらに、早期腎症の診断基準を改定する方向で小委員会(委員：榎野、猪俣、羽田)で改定案を作成し、次回の委員会に提出することが了承された。

③糖尿病性腎症データベース構築について

登録症例の匿名化については施設責任者が登録症例の個人名・個人番号を管理すること、症例登録のデータファイル(フォーマット)の原案作成を堺、榎野、山田(オブザーバー)の3名で行うこと、倫理委員会の承認を要する施設には同意書などの必要書類を送付し、各施設での倫理委員会への承認申請を行うこと、学会におけるデータベース構築事業とのすりあわせが必要となることなどが討議された。

④保険改正により、HbA_{1c}とともに尿中アルブミン測定 of 包括化がなされたことに対して、日本腎臓学会からも厚生労働省に要望書を提出することを要請した。

第2回合同委員会(通算第20回)は12月5日(土)東海大学校友会館で開催され、両学会からのアドバイザーを含め15名が出席し、榎野博史委員(日腎)の議長の下、以下の事項が討議された。

①旭川医科大学伊藤喜久教授より「尿中蛋白測定標準品プロトタイプの作成」に関する講演が行われた。

②「Time to Act」日本語訳について

羽田委員より、「Time to Act」の日本語訳作成状況について報告があった。日本語訳を松尾委員と守屋委員で校正した原稿が出来上がっており、17年1月末を目途に滋賀医科大学の古家先生と岡山大学の四方先生が2度目の校正と訳注の追加を行い、4月に印刷する予定となった。パンフレットの配布方法について協議され、日本糖尿病学会と日本腎臓学会の理事会の承認を得た上で、両学会の会員に配布することとなった。

③糖尿病性腎症診療ガイドラインについて

現在、糖尿病性腎症の病期分類の解釈について混乱が生じていることについて協議された。日本糖尿病学会認定専門医の症例報告用紙には、腎症(有・無)と(I・II・III A・III B・IV・V)期の両方を記入することになっており、1期の解釈に混乱が起こっている。病期分類の大幅な改定を行うことも議論されたが、現時点では病期分類の変更は行わず、日本糖尿病学会に対して症例報告用紙の腎症の欄から(有・無)の項目を削除してもらうように要望することとなった。

④早期腎症診断基準について

小委員会(猪股・羽田・榎野)の改定案について討議し、日本腎臓学会誌と日本糖尿病学会誌に掲載を依頼することとした。しかし、委員会後に早期診断基準を委員に再確認したところ、診断基準のみでは会員に十分に理解してもらえない恐れがあるので解説文を小委員会が作成することとなった。

⑤糖尿病性腎症データベース構築について

榎野委員より日本糖尿病学会の第1回糖尿病データベース構築委員会に関する報告を行った。今後は、日本糖尿病学会の糖尿病データベース構築委員会の中で、腎に関するデータベースを構築していくことが了承された。

⑥日本透析医学会からの参加について

日本透析医学会から日本糖尿病性腎症合同委員会への参加に関する要望があり、日本糖尿病学会と日本腎臓学会の了承が得られた。今回は、秋澤忠男教授がオブザーバーとして参加したが、今後委員の選任を行い、透析療法中の糖尿病患者に対する治療方針(透析患者の血糖コントロールの指標や透析患者に対する糖尿病治療薬の使い方など)や、糖尿病患者に対する透析療法の問題点(透析液や腹膜透析液中のブドウ糖濃度など)について協議を進めていくこととなった。

(4)移植関連学会合同委員会臓器移植中央調整委員会

委員長 金澤康徳

中央調整委員会の機能は①申請された移植希望者が臓器移植を受ける適切なレシピエントとなりうるかを判定する地域臓器移植適応評価委員会(七か所)と、②臓器移植術および術後を技術的に支えるエキスパート移植医集団である臓器移植実務者委員会を束ねている。中央調整委員会は臓器移植希望者を適切に適応評価した上で臓器移植ネットワークに登録するサービス機能を持つ。本組織による活動は順調に進んでおり、申請者は208名、適応有と評価され登録された移植希望者は142名(平成17年1月28日現在)となった。申請から登録までの期間も短縮され、可能である最短の3ヶ月に徐々に近づきつつある。

わが国での最高の質を保証し、臓器移植の成功を可能にする実務者委員会会員により構成される支援チームは現在までに行われた19件の臓器移植(平成17年2月26日現在)のうち早期の動脈血栓症で脱落した1例を除き18例で生着し、全例はインスリンから離脱している。これは十分な経験を持ったエキスパート達が積極的にこの移植システムに参加し活動している為である。国際的に見ればまだきわめて少数例の臓器移植ではあるが生着率で世界に誇れる成果を上げることが出来たのは、外科系と内科系の協力とチームワークの結果と考える。中央調整委員会はレシピエント登録

業務サービスを行うほか、上記の2つの委員会が、スムーズに活動できるように支援している。

このような成果の裏で、7名の登録者が待機中に死亡されたことは問題である。これは一重に脳死による臓器提供が現在まで31例で行われたに過ぎないことに起因する。脳死で提供の意思表示をされた方は600名を超えるといわれており、それらの方々の遺志を実現できなかったことは何処にあるのかを分析し世の中に明らかにしていく必要を感じている。臓器提供意思表示カードの更なる普及と、臓器移植の意義を更に社会に広めることが今後の活動として必要と考える。

脾臓移植の現在の問題の一つは脾臓移植術との整合性を取り適応を少し分けて考える必要があると考えられる点である。脾臓移植術は多くの研究者の努力により技術的にはかなりしっかりした状況にあるとされており、治療として認知されている時期に来ていると考える。しかし臓器移植とは少し異なる適応や移植後の病態の取り扱いが有りうると考えられ、糖尿病治療に於ける位置を確立する必要があると考える。

(5)糖尿病学用語集編集委員会 委員長 石田 均
平成17年度中に「糖尿病学用語集 第2版(2005年版)」を刊行すべく活動を継続している。

現在の状況としては、1)用語数として第1版に収録されている約7000語を基準とし、糖尿病学に携わる方々の共通用語を収載することを目的に新たな用語を積極的に取り入れるとともに、一部の用語については削除することとした。2)この中で解説を付すべき用語として約570語を学術評議員や有識者からの御意見を参考にしながら選定した。3)次いでこれらの用語について1語につき60から120字程度の解説を付すこととし、用語を専門分野別に分類の上、解説者68名(編集委員を除く)を決定した。4)平成16年度に3回の編集委員会(平成16年9月26日、平成17年1月15日ならびに3月20日)を開催し、執筆して頂いた内容を確認するとともに必要に応じて加筆や訂正を加える作業を進めた。5)これらの作業と並行して、新たに記載すべき用語や削除すべき用語の選定を続けるとともに、さらに日本医学会や日本内科学会や日本糖尿病学会の各委員会で用いられている用語との整合性についても検討を進めることとしている。

平成17年度の予定としては、第2版に掲載する用語の最終的な決定と解説文の確認を速やかに行い、6月頃までには学術評議員や有識者の方々に第2版の見本を送付のうえ、アンケート形式により内容について御意見を伺いたいと考えています。関係者の皆様におかれましては御多忙なところ恐縮に存じますが、宜しくお願い申し上げます。そのうえで17年度中の刊行

を目標として作業を進めたいと存じますので、引き続き御協力頂ければ幸いです。

(6)専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会
委員長 岡 芳知

平成15年4月に改訂第2版を出版したが、その後、中央認定委員会においてカリキュラムの追加と項目の整理およびランクづけ変更があった。また、新たに登場した治療薬についての記載も必要となっている。これを受けて平成17年度に改訂を予定している。

(7)倫理委員会 委員長 岩本安彦
特に報告すべきことはない。

(8)科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策
定委員会 委員長 田嶋尚子

本委員会は、平成16年6月15日(東京)および平成16年12月10日(東京)に開催された、「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」は2004年5月に発行され、順調に購買されている。平成16年度は、本ガイドラインの評価に関するアンケート調査、学会ホームページへの掲載、改訂に関して検討した。

①本ガイドラインの評価に関するアンケートの実施
折笠委員の企画により、日本糖尿病学会理事に依頼し、専門医17名、非専門医15名、コメディカル16名(看護師11名、栄養士4名、臨床検査技師1名)、計48名を選出していただき、アンケート調査を行った。評価には、AGREE(対象と目的、利害関係者の参加、作成の厳密さ、明確さと提示の仕方、適用可能性、編集の独立性)、Shanefelt(ガイドラインの作成方法と様式について、エビデンスの検索・要約について、勧告の作成方法について)、COGS(概要資料、焦点、目標など18項目)を用いた。その結果、患者さんによる評価がなかった点以外は良好で、全体としては80%程度の高い得点が得られた。

②改訂について

2007年5月を目標に小規模の改訂を行うこととし、執筆は原則として前回の項目担当者をお願いすることとした。各項目とも、初版以降に報告されたエビデンスを追加すること、ならびに新たに「糖尿病緊急症(Diabetic Emergency)」と「糖尿病と移植」を追加項目とし、執筆者を選出することとした。

③本ガイドラインの学会ホームページ他への掲載について

基本的に掲載することで意見が一致した。掲載する内容はアブストラクトテーブルを除いた全てとし、PDFにしてダウンロードできるようにする、目次からの検索が出来るようにする、掲載期間は理事会の承

認を得た後3ヶ月とし、その後会員の利用度等を見た上で継続掲載を審議することとした。

4. 「糖尿病学の進歩」開催について

1) 第40回糖尿病学の進歩

開催日：平成18年2月21・22日(金・土)
会 場：石川県音楽堂
世話人：小泉 順二(金沢大学医学部総合診療部)

2) 第41回糖尿病学の進歩

開催日：平成18年9月29日・30日(金・土)
会 場：北海道厚生年金会館，他(札幌市)
世話人：羽田 勝計(旭川医科大学第二内科)

5. 平成16年度収支決算に関する件(河盛理事)

総会で審議の上、16年度収支計算書が承認可決された。(本号 p 567~576)。

6. 平成17年度事業計画(追加)および補正予算に関する件(岩本・河盛理事)

総会で審議の上、平成17年度事業計画(追加)および補正予算が承認可決された。(本号 p 577~582)。

7. 平成18年度事業計画および収支予算について(岩本理事・河盛理事)

総会において審議の上、平成18年度事業計画および収支予算が承認可決された(本号 p 583~587)。

8. 名誉会員の推薦に関する件

理事会が推薦した赤沼安夫，金澤康徳，七里元亮，中山秀隆，松岡健平の5氏が名誉会員に承認された。

9. 学術評議員の承認に関する件

本年度は該当者がなかった。

10. 次会長(第50回学術集会)および次々会長(第51回学術集会)の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第50回会長に岡 芳知学術評議員が，第51回会長に門脇 孝学術評議員が選出され，ともに総会において承認された。

11. 第49回年次学術集会に関する件

平成18年5月25・26・27日の3日間，東京国際フォーラム(東京都千代田区)において開催の予定である。

12. 編集委員，中央認定委員会・試験委員会委員の交替に関する件

任期満了に伴い各委員会の委員が交替することとなった。

糖尿病編集委員会 ※(2005年度~2008年度)

北海道支部	吉岡 成人	北海道大学大学院医学研究科 病態内科学講座・第二内科
東北	小川 吉司	弘前大学医学部 内分泌・代謝・感染症内科
関東甲信越	野田 光彦 松島 雅人 小川 佳宏	虎の門病院内分泌代謝科 東京慈恵会医科大学 総合診療部・臨床研究開発室 東京医科歯科大学難治疾患研究所 分子代謝医学分野
中部	中村 二郎	名古屋大学大学院医学系研究科 病態内科学代謝病態内科学
近畿	横野 浩一 前川 聡	神戸大学大学院医学系研究科 老年内科学 滋賀医科大学第三内科
中国四国	松田 昌文	川崎医科大学糖尿病内分泌内科
九州	岸川 秀樹	熊本大学保健センター

食品交換表編集委員会 2005年度選出委員(2005年度~2008年度)

東北支部	佐野 隆一	医療法人さの医院
関東甲信越	田中 逸	順天堂大学医学部代謝内分泌内科
近畿	岡本 元純	大津赤十字病院内科
九州	竹田 晴生	八代総合病院糖尿病センター

治療のてびき編集委員会 2005年度選出委員(2005年度~2008年度)

北海道支部	吉岡 成人	北海道大学大学院医学研究科 病態内科学講座・第二内科
東北	高橋 和真	東北大学大学院医学系研究科 病院糖尿病代謝科
関東甲信越	貴田岡正史	昭和病院内分泌代謝科
近畿	北川 良裕	大阪鉄道病院
九州	岩瀬 正典	九州大学大学院医学研究院 病態機能内科学

専門医認定委員会(2005 年度～2006 年度)

北海道支部	吉岡 成人	北海道大学大学院医学研究科 病態内科学講座・第二内科
	黒田 義彦	滝川市立病院内科
東北	佐藤 譲	岩手医科大学医学部 糖尿病代謝内科
	富永 真琴	山形大学医学部臨床検査医学
関東甲信越	杉原 茂孝	東京女子医科大学附属第二病院 小児科
	柴 輝男	三井記念病院
	林 洋一	日本大学医学部付属板橋病院 内科 3 部門
	平尾 紘一	H.E.C.サイエンスクリニック
	橋本 尚武 宇都宮一典	国保旭中央病院糖尿病代謝内科 東京慈恵会医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科
中部	中村 二郎	名古屋大学大学院医学系研究 科病態内科学代謝病態内科学
	小泉 順二	金沢大学医学部附属病院 総合診療部
近畿	鹿住 敏	武庫川女子大学生活環境学部 食物栄養学科
	黒江 彰	関西電力病院糖尿病内科
	柏木 厚典	滋賀医科大学第三内科
	絵本 正憲	大阪市立大学大学院医学研究科 代謝内分泌病態内科学(第二内科)
中国四国	池田 匡 谷澤 幸生	鳥取大学医学部保健学科 山口大学大学院医学研究科 生体シグナル解析医学講座 分子病態解析学
九州	桶田 俊光 大槻 眞	新小倉病院 産業医科大学第三内科
理事	門脇 孝	東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科
	清野 裕	関西電力病院
	岡 芳知	東北大学大学院医学系研究科 糖尿病代謝科
	名和田 新	九州大学大学院医学研究院 病態制御内科学

注) 専門医規則第 6 条の改定に伴い、委員の任期は 4 年、2 年で半数交替とするために再度 2006 年度に交替とする委員と留任する委員を理事会にて決定する。

専門医試験委員会 2005 年度選出委員

北海道支部	柳沢 克之	市立札幌病院内分泌代謝内科
東北	鈴木 進	東北大学大学院医学系研究科 附属病院糖尿病代謝科
関東甲信越	相澤 徹 能登谷洋子 八木 一夫	信州大学保健安全センター 東京医科大学第三内科 千葉大学大学院医学研究院附属 病院糖尿病・代謝・内分泌内科
	笹岡 利安	富山医科薬科大学医学部 臨床薬理学
中部	佐々木秀行	和歌山県立医科大学付属病院 第一内科
	藤本 新平	京都大学大学院医学研究科附 属病院糖尿病・栄養内科
中国四国	石田 俊彦	香川大学医学部 内科学講座第一内科
九州	梅田 文夫	福岡市医師会成人病センター
理事	荒木 栄一	熊本大学大学院医学薬学研究 部総合医薬科学部門生体機能 病態学講座代謝内科学分野
	岩本 安彦	東京女子医科大学糖尿病センター
	南條輝志男	和歌山県立医科大学第一内科
	牧野 英一	愛媛大学医学部 糖尿病内科(臨床検査医学)

13. 平成 17 年度選挙管理委員の承認について

細則第 38 条により、下記の様に承認された。

北海道支部	柳沢 克之	市立札幌病院内分泌代謝内科
東北	山田 憲一	山田憲一内科医院
関東甲信越	河津 捷二	埼玉医科大学総合医療センタ ー健康管理科兼第一内科
中部	榊原 文彦	半田市立半田病院内科
近畿	三家登喜夫	和歌山県立医科大学臨床検査医学
中国四国	石田 俊彦	香川大学医学部内科学講座第一内科
九州	榊田 典治	熊本大学大学院医学薬学研究 部総合医薬科学部門生体機能 病態学講座代謝内科学分野
会長経験者	清野 裕	関西電力病院

14. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員について

細則第 42 条により、下記の様に決定された。

第 40 回「糖尿病学の進歩」世話人	小泉 順二
第 41 回「糖尿病学の進歩」世話人	羽田 勝計
第 49 回会長	田嶋 尚子
第 50 回会長	岡 芳知
学術担当理事	小林 正

15. 学会後援について

申し込みのあった 5 件全部を後援する事とした。

- 1) 第 5 回先進インスリン療法研究会
平成 17 年 8 月 20 日
- 2) 糖尿病 Up・Date 賢島セミナー
平成 17 年 8 月下旬
- 3) The 8th Meeting of Immunology of Diabetes Society
平成 17 年 10 月 6 日～9 日
- 4) 第 17 回分子糖尿病学シンポジウム
平成 17 年 12 月 3 日
- 5) 第 5 回糖尿病教育資源共有機構年次学術集会
平成 17 年 8 月 5 日～6 日

16. 専門医制度規則第 2 章第 6 条の変更に關する件

次のように変更することとなった。

第 2 章 専門医制度委員会

現 行	改訂案
第 6 条 各委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、連続 3 期を超えないものとする。各委員会委員に欠員が生じた場合、本学会理事長は当該委員の補充を行なう。その場合、後任者の任期は前任者の残余期間とする。	第 6 条各委員会の任期は、次のように定める。 1. 専門医認定委員の任期は 4 年とし、再任を妨げない。ただし、本規則効力発生後、最初に選任される委員の半数のものに限り、その任期は 2 年とする。この委員の後任として選任されるものの任期は 4 年である。 2. 専門医試験委員・支部専門医認定委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、連続 3 期を超えないものとする。 3. 各委員会委員に欠員が生じた場合、本学会理事長は当該委員の補充を行なう。その場合、後任者の任期は前任者の残余期間とする。

(追加報告)

解 説

この制度の内容に關しては規則に述べられた通りでありますが、……………中略……………

* 認定教育施設(診療科単位として)について

①認定教育施設(有床)は管理中の糖尿病患者数は 200 名(ただし、小児では 50 名)以上であり、年間入院患者数は 50 名(ただし、小児では 4 名)以上である事が必要であります。また糖尿病臨床に關する学会発表または論文発表が常時行われていることが必要であります。

②認定教育施設(無床)は管理中の糖尿病患者数は 200 名(ただし、小児では 50 名)以上である事が必要であります。また糖尿病臨床に關する学会発表または論文発表が常時行われていることが必要であります。

但し認定教育施設(無床)での研修期間は 1 年を限度とします。

注 (太字ゴシック 追加)

17. 「広報」担当について

「広報」の業務を庶務担当理事が兼務することとし、田嶋尚子理事が担当することとなった。

18. 診療行為に關連した調査分析モデル事業に關する件

内科系学会のサブスペシャリティとして本事業に協力することとなった。

19. 日本糖尿病協会委員会の今後のあり方について

発足当時に作成された当委員会の活動目的が現在の状況にそぐわないことから、「日本糖尿病協会委員会」に係る細則第 32 条に代わる新しい方策を検討するためワーキンググループ(門脇、南條、清野、河盛、加来、岩本の 6 名の理事)を設置することとなった。

20. 糖尿病学用語集に關する件

「糖尿病性網膜症」、「糖尿病(性)網膜症」、「糖尿病網膜症」のいずれの表記を採用するかについて、理事会は「糖尿病網膜症」とすることとした。

以上 文責 庶務担当常務理事 岩本安彦